

5 2 バロック明暗法絵画の出発点

《岩窟の聖母》：【キアロスクーロ・スフマーテ技法】

2023

真鍋友範

【明暗法・キアロスクーロ】で思い起こされるのは、バロックの画家カラヴァッジョだ。

しかし、その起源は本当にカラヴァッジョなのか。

ドイツ学派ではテネブリズムと呼ばれるが、ここでは明暗法キアロスクーロとして統一して説明したい。

では、まず3点の作品を概観しよう。



《岩窟の聖母 ロンドン版》



《人生の3世代》（イエスの導くごとく我（レオ10世）も導かん）



《聖マタイの召命》

- さて、制作順は、1)《岩窟の聖母・ロンドン版》は、1482年
2)《人生の3世代》(イエスの導くごとく、我(レオ10世)も導かん)は、1510年
3)《聖マタイの召命》は1599-1600年

《岩窟の聖母・ロンドン版》は、レオナルド・ダ・ヴィンチの問題作だが、この作品がキアロスクーロの元祖だと認識されることはない。

しかし、フィレンツェ・ルネサンスの時代では、色彩の扱いは全体的に明暗の大きい変化は少ないフラットな彩色が普通であった。

例えば、ラファエロを思い浮かべれば良いだろう。ただ、ラファエロも、教皇の肖像画においては、背景を暗く描いている。これは実際に室内が暗かった為だ。

さて、3作品の共通点は何か。

それは、【暗い空間、に明るい外部光が差し込んでいる状態】だ。この明暗コントラストこそ、現在イタリアで《キアロスクーロ》と呼ばれている絵画技法だ。(ドイツ学派は《テネブリズム》と呼ぶが、ここでは《キアロスクーロ》で統一する。)

さらに3点には共通点がある。それは《スフマーテ》だ。

スフマーテ技法の元祖はもちろんレオナルド・ダ・ヴィンチとされるが、ジョルジョーネも見事にスフマーテを用いた作品を描いている。

この、スフマーテ技法と混合したキアロスクーロこそ、3作品の共通項だ。

レオナルド・ダ・ヴィンチの《岩窟の聖母》とされる作品は、2点あるが、ルーブル版の方はレオナルド自身の直筆ではなく、弟子たちの合作だ。不味いデッサンカやまずい構図、そしてフラットな典型的全体彩色は、当時の先端的表現の《最後の晩餐ロンドン版》とは比べようのない駄作なのだ。

おそらく、ヴェネチアにいたジョルジョーネは、レオナルド・ダ・ヴィンチがミラノを離れヴェネチア政府に自己の潜水技術プランを売り込みに訪れていた時期に、この技術を学び取って、《イエスの如く我も導かん》(誤題名：人生の3世代)を描いたのだろう。(ただし、この作品は、ジョルジョーネ没後に完成している)

カラヴァッジョはこの作品をどこかで見ているという確信が私にはある。

- 1) イエスの横顔が極めて似ている。
- 2) イエスの手の表現が、其々そこ、とあそこ、の近似表現であること。
- 3) 帽子姿の若者が登場すること。
- 4) イエスの立ち位置と中心円を囲む構図技法が近似していること。
- 5) 最後は3点にも共通するスフマーとキアロスクーロの混合技法だ。

カラヴァッジョは、このジョルジョーネ作品から、かなり大きいインスピレーションを得て《聖マタイの召命》を描いている。

同時に、カラヴァッジョは《聖マタイの召命》において、レオナルド・ダ・ヴィンチのスフマー、キアロスクーロの混合技法を更に高度化した表現を行った。

《巖窟の聖母・ロンドン版》では、洞窟への侵入光は画面左上方向からのみ。対して、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》では、複数の光源からくらい室内に向かって光が注がれている。光の扱い方は、明らかにバロック時代になり複雑化しているが、その原点はやはり《巖窟の聖母》であると認めざるを得ないのだ。

このように、レオナルド・ダ・ヴィンチの【キアロスクーロ・スフマー技法】が、ジョルジョーネやカラヴァッジョに与えた技法上の影響は多大であったと認めざるを得ない。

つまり、【キアロスクーロ・スフマー技法】の出発点とは、レオナルド・ダ・ヴィンチの《巖窟の聖母・ロンドン版》にあったという事実だ。